Misuse and abuse of English terminology in physiotherapy articles

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-03
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/7274

理学療法学　第15巻第1号　5～9頁（1988年）

論　説

日本語は理学療法論文に適さぬ言語か？*

荻原新八郎**

全国で活躍されている理学療法士の方々，そして理学療法士を目指して勉学に勤しんでいる学生の皆さんは，毎日出勤したり，登校する時にどのような服装でそうしているのでしょうか？　皆さんのすべてが社会常識に反しないと思われる恰好をし（東京の六本木界隈へ出掛ける時は別かもしれぬが），また職場でも決められたユニフォームに着替えている筈である。ふりかえって我が国の理学療法論文に目を通すと『国籍不明』な文章や外来語（ほとんど英語）との不要・不可解な混合，和文の『植民地化』，そして『失語症的』表現の何と多いことか！まるで和服と洋服を一度に着こなそうと四苦八苦しているようである。最近2～3年間に発行された理学療法雑誌から実例を幾つか抜粋し，筆者が受けた印象および考え方を述べる。

～脊椎のオステオポーシスでは～，～の osteoporosis の治療では～：『骨粗鬆症』という和文用語がありながら何故わざわざこのように表現するのだろうか？『鬆』という文字が難しいからだろうか？

～の follow up して～：『継続管理』とか『追跡調査』という意味で用いているのだろうが，何故原語でなければ駄目なのだろうか？　加えて，名詞の形として用いているにもかかわらずハイフンが抜けているのが多々ある。誤用を犯してまでこのように表現する理由があるのだろうか？

～が Placebo 群～：『偽薬群』とか『偽薬投与群』という和文用語を作ってはいけないのだろうか？

～Control 群～：何故『対照群』ではいけないのだろうか？　これを服装に例えるならば，下着のまま外出するようなもの，或いは寝間着姿で重要な会合に出席するようなものである。

～の Corelation は～：相関関係を云々したいのだろうが，何故日本語でそう表現しないのだろうか？『r』が一つであるのは故意か他意か？

～になり，recovery stage(Brunnstrom)は～，～Stage Ⅳが～：『ブルンストロムの回復段階Ⅳ』では読者が理解に苦しむとでもいうのだろうか？

～術前の Chemotherapy と Radiation therapy に～，～は Multiple Sclerosis の～，～が Family の～，～非対称的な Dysfunction を起こして～，～Idiopathic Scoliosis に対し～，～仰臥位で Trunk Rotation の運動をさせ～，～上肢の pain を訴えて～，～muscle coordination が優れて～，～Supine では～，～大腿骨…の fracture を合併して～，S-D カーブ，～motivation の強化～，～大腿四頭筋の Muscle Setting に～：これらの英文用語にはれっきとした和文用語が存在する事実を執筆者は御存知ないのだろうか？　前後の文章の意味から，英文用語を原語で綴って用いねばならない特別な理由が筆者にはどうしても見出せない。これを我々の服装に例えるならば『上半身が和服で下半身はズボン』，『上半身が背広とネクタイで下半身は袴』，はては『洋装に下駄履き』といったいでたちを想起する。小学校から高等学校までの国語の授業においてこのような書き方は絶対に学ばなかった筈なのに，いったん理学療法士として社会に出ると何故このような作文になってしまうのだろうか？

～より quadriceps の～，～では quadratus lumborum が～，～で patella tendon に～：解剖学用語に関しても昔から和文用語が存在するのである。

大学や病院，そして理学療法士養成校の英語名にも怪しげなものがある。筆者の学生時代，ある米国人の理学療法教官は我が国の School of Rehabilitation や病院の Department of Rehabilitation という言葉に接した時，『人々を更生させ，再び社会に送り出す学校とか部門である』と思ったと語してくれた。『○○ Hot Spring Hospital』は『○○温泉病院』の直訳であるが，英語圏諸国には温泉を病院化する習慣が無く，非常に奇異に感

---

* Misuse and abuse of English terminology in physiotherapy articles

** 金沢大学医療技術短期大学部理学療法学科
Shimpachiro Ogiwara, RPT: Associate Professor, Division of Physical Therapy, School of Health Sciences, The University of Kanazawa

じるであろう。

何校かの医療短大は『College of Medical Technology and Nursing』と称しているが，英語圏諸国では理学療法士・作業療法士の養成校に『Technology』という異分野の名称はつけない。事実，『Technology』と命名されるのは一般的に二年制短大でしかも技術・工学関係の学校のことである。北米諸国の理学療法士から見れば，我が国の『医療技術短大』は機械のみを相手にする単なる技術者を養成する学校であり，またそうするのに三年間もかけるのかと驚くかもしれない。技術偏重から脱し，専門職集団を目指すのであれば，それに相応しい名称を考えるのが当然であろう。何十年も前から教育・診療の中で科学的・専門職的思考が強調されてきている北米諸国の理学療法士ならば4年制になっても『医療技術学部』というような名称は決して付けぬであろう。また彼の地では10～15年くらい前から『health sciences』というのが医療関係の学部や病院の名称の主流になっている。大学の付属病院はもはや『University Hospital』でも『Medical Center』でもなくなってきているのである。何故ならば，『medical』というのは病める者が病院や診療所で治療を受けるという従来からの伝統的な医療形態の概念を意味するが，これは現在ではもはや狭い概念でしか捉えられなくなっており，我が国でも作業療法士が保健所，その他で勤務するようになったり，理学療法士ですら病院外で予防・保健にまでかかわり始めているのである。医療従事者のこのようなかかわり方は英語圏諸国においては『health』の範疇に入る；すなわち『medical』は『health』に包含されるのである。ところが我が国では『health』という言葉が偏った概念にとらえられている（例えば娯楽施設がヘルスセンターと称したり，単に『健康』という意味にしか理解されない）ためか，医学関係者にはこの言葉の使用を躊躇する態度が見られる。養成校の名称によく用いられる『Allied』という言葉も『医学・医師と類似の』という意味から，筆者は差別・従属という印象を持つ。現在はティームワークの時代であり，医師といえども他の医療従事者の専門性を十分に信頼・尊重しなければ，医療の一般的水準でさえ保てないのである。文法上正しければ『死んだ』英語を用い，時代遅れの表現にも無視し，和製英語的表現で満足していてよいのであろうか？

～に Toe-to-thumb operation を行って～：幼児に枕許でおとぎ話でも聞かせている光景を想起させるような用語である。患児にこのような手術について説明する時ならいざしらず，科学的思考を駆使して診療，教育，および研究に没頭し，立派な論文を書こうと努力している我々が幼児的表現を用いなくてもよいだろう。これに関しては『造母指術』という立派な用語がある。

何年か前の理学療法士学会で見たあるスライドには，症例紹介の一部として『mail ○○名，femail ○○名』とあり，小学生でも理解できる『男子，女子』としておけばこのような恥をかかずにすんだと思う。このような例は多々ある。

最近の集談会で遭遇した症例紹介のスライドには一か所を除いてはすべて日本語であった。その一か所とは『診断：hemorrhagic infarction』であった。この発表者は『出血性梗塞』という用語を知らなかったのか，或いは知っていながらわざと恰好づけようとしたのだろうか，また或いはこの用語を表す漢字を知らなかったのだろうか？

ある論文の題名『Leg Brace of in Hemiplegia』や，他の論文中にあった『Non-Why 法』などは筆者には理解できなかった。執筆者は自分の考えを読者に完全に且つ正しく理解して欲しいと願いながら書いているのだろうか，それとも外来語をふんだんに且つ原語で表現して得意になり，単に読者を『うならせたい』のだろうか？理学療法論文は執筆者の自己満足のためのものか？　雑誌がいったん印刷・発行されてしまえば論文中の誤りや『恥』までが永久に残ってしまう事実を御存知なのだろうか？

～は Case by case で考えれば～，～全身の伸筋の Tonus をおとす目的で Positioning を行なって～，～横断面で ideal な Rotation を起こして～，～で sitting のバランスがよいのに turn over が～，～における heel-contact と push-off の～，～反射の回復は caudal から cephalad へと進む～：これらは和文か，それとも英文か？　どちらでもない；つまり『国籍不明』なのである。ここに羅列されている英語にしても，このような中途半端な用い方をされて決して快く思わぬだろう；『初めから終りまで和文用語と助詞を抜いて用いて下さい』と望むだろう。羅列した英文用語を助詞の『て，に，を，は』で繋げば立派な邦文科学論文になるのだろうか？　このような書き方が我が国では常識になっているようだが，まったく嘆かわしい。筆者は洋誌については英文理学療法雑誌しか読めぬが，その文章中に常用外来語がごく稀に使われていることはあっても日本語，アラビヤ語，ロシア語等の外国語が原語で所狭しと混ざっているのを見たことがない；洋誌における論文執筆者は外国語の知識をこのような形で披露・誇示する悪癖を有しない。このような悪癖は我々の後進性を物語ってはいないだろうか？

リラクゼーション：ある医学雑誌に書かれた文章の中にあった用語である。我々理学療法士は医師に比べれば教育の程度・年限ともに劣る。故に我々にとって医師のすること，書くことはすべて正しく且つ模倣すべきことなのであろうか？　言葉というものは，それがたとえ間違っていても，このようにして一番偉い人から下位の者へ頂繰りに受け継がれていき，定着してしまう；つまり言葉は『生き物』なのである。この単語の発音を一度辞書で調べてみる価値がある。

～総合的な老人のPT的アプローチは～：このように表現してまで読者に『偉い！』と思わせたいのだろうか？　ちなみに多くの老人は『老人』よりも『高齢者』と呼んで欲しいと願っているのである。

～をDr, Nrs, MSWに～：『Dr』というのは一般的にアルファベットで綴った医師の名前の前につけるもので，このような用い方は誤りである。執筆者は『医師』という用語を知りながら同僚との普段の会話で『ドクター』と使っているためにこのように書いたのだろう。しかし話言葉と書言葉の違いくらいは高校時代に学んでいる筈である。ましてや科学論文というのは小説を書くのと違い，事実をありのままに且つ正式な用語を用いて記述せねばならないのである。ちなみに洋論文に例えば『Dr. Smith』とあれば，スミス『医師』なのか或いはスミス『博士』なのかを見分けねばならない。『Nrs』は看護婦を指しているのだと思うが，『看護婦』という用語は過去の遺物なのだろうか？　『MSW』にしても和名が存在する筈である。

～復職したcaseは19caseで～，～外来PTケースは○○名で～：『復職したのは19症例で～』とか『～外来理学療法受診者は○○名で～』ならば筆者はこの論文を最後まで読んだろう。

～Bobath法～，～Charnley～：『ボゥバス（つまりボーバス）』，『チャーンリー』の方がより正確な発音である。他分野の論文をたまたま読んでいて英国の地名に『リーディング（Reading）』とあったが，『レディング』が正しい。原語の発音にできるだけ忠実に従えば誤解も少なく，また恥もかかずにすむのである。

PT中に患者がACTIVEにCONTROLする～，～PartialおよびComplete Degenerationを呈した～，～のアプローチを行った。：これらを『失語症』的表現であると言えば叱られるだろうか？　『PT』という略字を理学療法と理学療法士の二つの意味に見境なく用いているのもどうか？　我々は自分自身の職業を『PT』と内外に宣伝しているが，『内』（同僚）に対してはともかくとして『外』（社会）に対しては適切とは思えない。何故我が国の理学療法士は外に向かって『自分は理学療法士です。理学療法の専門家です。』と胸を張って言わない（言えない？）のだろうか？　『PT』と言わねば沽券にかかわるのか，それとも周囲の職員よりも『偉い』と思わせたいのか？　それに対抗してかどうかは知らぬが，看護婦さんまでも自分達のことを『ナース』と呼んでいるようである。三年前の理学療法士学会における学会長の講演の中に『100名の主婦の中で理学療法を知っていた人はたったの20%であった』という話があったが，さもあらんと思う。我々が何者であるかを社会に常に正確な表現で知らせぬかぎり，理学療法や理学療法士に対する社会の認識は上がらないのは当然のことであり，いつまでも『リハビリ』や『訓練』で誤摩化さねばならぬであろう。理学療法士は『リハビリ訓練士』ではないのである。理学療法や理学療法士という用語を単なる法律用語としてのみに留めておいてよいものか？　『先生，眼のリハビリをして下さい』という患者さんを軽蔑できるだろうか，また『Rihaをお願いします』と書かれた処方箋を陰で笑えるだろうか？

～PT，Nurseサイドでも～：『～理学療法士，看護婦側でも～』では恰好が悪いと言うのだろうか？　中には『Dr. Side』とか『Drサイド』なる表現があり，筆者は初め『サイド医師』か『サイド博士』かと思ったが，『医師側』という意味らしい。このような無節操な表現にはまったくうんざりする。最近の理学療法教育の現場では研究の分野にも力が入れられるようになったが，方法や結果を正しく伝える『意志疎通』としての執筆段階で文章の書き方や用語の用い方について指導されているのだろうか？　しかし学生にとっては，先輩および理学療法士の模範になる人々が母国語をこのようにあしらっているのだから，『失語症』的表現を拡大再生産せぬようにするのは至難の技であろう。

～末期癌患者のCareに～，～CureからCareへと～，～のRisk factorが，～のrisk管理は～：他の医学雑誌にもこのような表現は日常茶飯事のことである。『Care』は介護とか世話をする，『Cure』は治癒とか治療すると言う意味を適切に文章の中に組み込めばよいのである。『risk factor』という用語を『危険要因』とか『危険因子』と表現する人は教養が無いとでも思われるのかもしれない。我々は自分達が漢字を操る民族であることを忘れてしまっているようだ。外国語とのチャンポンは水と油を混ぜようとするのに似ている。フランス語と英語を公用語とするカナダでさえも，これら二つの言語を混ぜて用いない。

以前筆者はある医師に『医学論文に原語を混ぜて書く

習慣』について尋ねたところ，『原語でなければ読者にとって理解できない』が答であった。本当にそうだろうか？　筆者には怠慢或いは読者を蔑ろにしているとしか思えず，また読者も不感症になり，疑問を感じないのではなかろうか？　どうやら日本人には医学論文は漢字と仮名だけでは書けないという考え方が骨の髄まで染み込んでいるようである。また『訳語が無い』という理由もよく聞く。しからば，訳語をあみだすのである。現在用いられている用語の多くは明治時代に造られたものであり，これからも明治の先輩に見倣って造語に励めばよいのである。

我が国は軍時的にはアメリカ合衆国の核の傘の下にあるかもしれぬが，だからといって自分達の言語を自分達の手で『植民地化』しなくてもよさそうに思う。過去12年間の英国・カナダ両国での生活を通して筆者は『日本人は概して優秀な民族であり，日本語も決して劣等な言語ではない』という印象を持っている。母国語の使用について我々は『良い意味での民族主義者』になるべきであろう；表現を変えれば，もっとフランス人やカナダのケベック州民の爪の垢を煎じて飲むべきである。しかしフランスでは必死の努力にもかかわらず幾つかの英単語が市民権を得てしまっている；例えば，自動車は『le car』だそうである。

The Prognosis of Periferal Facial Nerve Palsy, ～抑制 (infibition)～, Application of Sholder Sling, PT Effects for Chronic Hemiplegic Parients：恰好つけたつもりであろうが綴りを誤った例である。特に最後のものは和製英語的表現であり，『The efficacy of physical therapy……』とすれば英語的表現に近くなるであろう。また『hemiplegia』は疾病ではないのだから『chronic』と表現するのは不適当であり，『residual』とすべきであろう。

ファシリテーション・テクニック：『神経筋促通法』とか単に『促通法』を正式な理学療法用語に決めればこのように長たらしく書かなくてもよくなるだろう。

～マンツーマン～，～マン・ツー・マンによる個別療法は～：こればかりは『man-to-man』と原語で綴る人を誠多に見掛けない。研究社発行の英和辞典によれば，これは『率直な，包み隠しのない，腹を割った』と言う意味であるが，理学療法の分野では『個別』治療という意味で用いられていることがほとんどのようである。そうならば二番目の例はどう解釈すればよいのだろうか；類語反復かそれとも原語の真の意味が含まれているのだろうか？

ある論文の題名に Muscle Strengthening Exercise for Weak Muscles (less than MMT 3) というのがあったが，『muscle』が重複しており，筋力強化（muscle strengthening）というからには筋肉（muscles）は弱化（weak）しているに違いないのである（類語反復）。また括弧内の言葉の意味は和文の題名が無ければ理解できなかっただろう。これも和製英語的表現の典型例であり，理学療法雑誌に掲載されている論文にはこのような代物が多い。

英文抄録に関しても綴りや文法上の誤り，そして会話調の表現は日常茶飯事のことである。中には抄録としての『入れ物』――その研究の目的，方法，結果，考察，および結論を凝集したもの――さえ不備なものがある。随筆を書くようなつもりでいるのだろうか？　こうまでして執筆者は論文や雑誌の体裁を保ちたいのだろうか？　理学療法論文を読んでいていつも『裸の王様になった執筆者』を思い浮かべ，苦々しく思うのである。我々はいつの頃から恥を忘れた民族になりさがってしまったのだろうか？　現在盛んに『国際化』と言われているが，母国語をこのようにあしらうのが国際化なのだろうか？　我が国の理学療法雑誌に載る英文研究題名や英文抄録はいったい『誰』に読んでもらうためのものなのか？　これらが欠けている論文は無価値なのか？　我々は何故『英語する』のだろうか；自己満足のためか，それとも英語の苦手な読者を圧倒し，一人で優越感に浸るためか？　我々は日本語を英語の『植民地』にするために苦労して英語を学んできたのだろうか？　日本人としての誇りはどこへ消え失せてしまったのだろうか？　和文に外国語を原語で混ぜなければまともな理学療法論文が書けないのならば，いっそのこともう日本語を用いるのは諦め，そして日本人であることもついでに止めてしまおう。

（主旨は昭和61年9月14日 金沢大学 医療技術短期大学部理学療法学科・作業療法学科同窓会学術集会で述べた。）

<Abstract>

Misuse and Abuse of English Terminology in Physiotherapy Articles

Shimpachiro OGIWARA, RPT, MJPTA, SRP, ONC, MCPA, BPT

Associate Professor, Division of Physical Therapy, School of Health Sciences, The University of Kanazawa

There is hardly any place in this country where one does not see words written using the Roman alphabet, most of which are in English. The author noticed an acceleration in this trend when he returned in 1981 after twelve years' absence from Japan. While living abroad articles were read in the Japanese Journal of Physical Therapy and Occupational Therapy and sentences were found to be mixed throughout with foreign terminology—mainly English. It was most irritating to read them.

In contrast, according to the author's knowledge, no journal written in English, even those published in non-English-speaking countries, contain foreign words in their articles except a few well-established ones and these are mainly Latin.

It is a well-known fact that we Japanese physiotherapists are, in general, eager to learn and study English to obtain up-to-date information from the countries where physiotherapy is well-established. Is the end product of this struggle, however, the production of professional articles using what the author calls 'pidgin' Japanese sentences? Is the Japanese language so inferior that we cannot effectively express our professional thoughts and opinions without interjecting with English words?

In this article the author has sited many examples of the misuse and abuse of English terminology, discussed the implication of this phenomenon, and suggested possible appropriate measures to remedy it.